

子どもが即興的にことばにふしをつけて遊んでいる折は、取り上げていっしょに歌うようになり、自然に遊んでいる白雪姫ごっこ・七匹の子山羊ごっこ・小鳥ごっこなど遊びの中に、先生もいっしょに仲間に入れてもらい、子どもたちの遊びの中でリズムが出来ているので、その動きをみてそれにふさわしい適当な音楽を加えて発展させ、より遊びを楽しむように気をつけた。

幸い組の中に音楽リズムが好きな子どもが何人かいて、音楽リズムの機会をきいそくし、目を輝かせ喜んで参加する子どもたちの影響で、他の子どもたちも楽しんで音楽リズムに親しみ参加出来たことは、本当によかつたと思っている。ふりかえって考えてみると、音楽リズムのあり方、環境やふんいきのつくり方指導の面での工夫、素材についてその他、まだまだこれからいろいろと掘りさげ、もつともっと深く研究していくいかなくてはならない問題が多いと思っている。

なお、子どもたちが、これからも幼稚園

でも家庭でも音楽リズムの経験がいっそう充実した楽しいもので満たされ、心身共にされていくことを望んでいます。

発達して音楽的な芽ばえがすくすくと育成されていくことを望んでいます。

四才児の音楽リズム



関治子

た。

迎える側の教師である私としては、四月

のはじめに、次のようなことを考え指導の目標とした。

(1)個人個人の特性をいかして、それを伸ばしていく。
(2)楽しく、自然に音楽リズムを身につけていく。

(1)については、幼児にはそれぞれ本来の性質と、環境による体験から、特性というものを持っている。自然にうたを口ずさむ

幼児、身体を動かすことが好きな幼児、全く音楽リズムに関する経験を持たない幼児、よい点も誤った点も、足りない点も種々さまざまではあるが、いずれにせよ、これが幼児の持ち味としてあらわれているので、それをいかして伸ばしていきたいものだと考えた。

四才児の入園当初は数少なかつたが、だんだんに家庭で、ピアノやうた、バレエを習わせるという幼児が出てきたが、これらは、四才児では幼稚園として特に不都合な現象も起きた。幼児の発達に適合しないお稽古事をしている場合は問題ないが、心理的な面や、身体的な面で無理がないか幼稚園で個人を見つめている時に、案外見出せることがある。

とくに友だち関係がスムーズにいかない乱暴な、落ちつきのない男児が、うたを習っているところから、幼稚園でも、うたをうたう時に、やさしいきれいな声でうたつていることがわかった。その後、「きれいな声ね」とほめたり、皆の前でうたつた

りしているうちに、この幼児には、この点から指導して、生活全体も軌道にのせていくことを思つたこともあった。

(2)については、幼児期には、こまかに運動をする筋肉の発達は不十分であるが、全

機能を以て反応し、身体活動がおこなわれるところから、発達に伴なって、無理なく自然に音楽リズムを身につけさせたいと思つた。

自分の気持通りに動ける・うたえるといふことは理想の姿であろうが、その反応のあらわれ方は、おののおの非常に異なつてゐる。そこで、音楽リズムの指導は、皆が制約や圧迫を感じることなく、興味を起こしたりする環境、すなわち、自然な生活に従つておこないたいものである。

入園当初、わらべうたをうたいながら、「かごめかごめ」をしてあそんだ。何か月たつても、こういうことに興味を示さない幼児と、興味をもつて見守っていても、誘いにも応じない幼児がある。やはり、基礎的動作は、音どおり動作することをどう

しても必要とする。

○四才前期

四才の前半は音どおりにうたい、音どおりに動作する。

自由表現を幼児のよく知つてゐる題材で数多く動作する。

こういう指導のためには、私の方の注意として、リズミカルであり、気持を独創的に持つていきたいと考えた。

幼児は模倣性が強いので、いつの間にか先生のまね、友だちのまねをしてしまう。このまねということが、とても必要で基礎となつていく場合と、独創的な表現を阻害してしまう場合がある。

四才の前半は、特に、何か身体を動かして表現したい時期ではあるが、基礎動作も十分でない、どうやってよいかわからぬので、見よう見まねで動作することが多い。このような時、先生のとり上げ方、ほめ方、説明のしかた、先生の動作のしかたなどで、つぎの表現へ発展できるように持

つていくことが大切と思う。

基礎動作は、音どおりにといつても、ただ音だけを与えるというより、二分音符、四分音符、八分音符などは、それぞれに合った曲を選んで、すずめ、ライオン、うさぎなどと自由表現と結びつけて動作させることで、音だけのリズムを与えると、今度は「何がでてくるか」という期待で聞いて、それを動作するということがまた楽しみになることもある。やはり、条件反射のように、この曲の時にはこの動作で、この方法と決まってしまうより、興味をもつて新鮮な気持で動作するようにさせたいと願つてきた。

うたうことでは、指導書などにその指導法などくわしくかれているが、私としては、ただうたうというのではなく、そのための情緒性をよく把握してほしいと思つた。それには、その曲を、よくひいたりうたつたりして、その曲全体を先ず感じさせること。それには、リズミカルなものは正しくリズミカルに、やさしい静かなものは

活発すぎないようにと注意した。そして、幼児にも、その違いというものを例を挙げてうたつたり、ひいたりすると、幼児はだんだん、その違いを早く感じるようになつた。リズムに合わせるのに、幼児は、自然に頭を動かして拍子をとっているのをみてもわかるように、うたをうたうにも、身体の動きと密接な関係があるので、うたいながら身体的表現をさせるのも、たいへん自然な方法で効果がある。

○四才後期

四才後半は、自由表現をあそびにおりこんで、リズムあそびを多くとりいれる。

曲に合わせて動作し、音楽にのる。
こういう事を中心にプランを立てたり、題材を考えたりしてみた。

前に挙げた模倣のことにも再びふれてくるが、ここでは模倣のよい方の例として、次の材料は幼児にとても喜こられた。すくなくして、そのうたは、うたうことでは、指導書などにその指導法などくわしくかれているが、私としては、ただうたうというのではなく、そのための情緒性をよく把握してほしいと思つた。それには、その曲を、よくひいたりうたつたりして、その曲全体を先ず感じさせること。それには、リズミカルなものは正しくリズミカルに、やさしい静かなものは

なると、五、六人から七、八人のグループで、円をつくって歩くことができるようになる。そこでひとりが円の中心にはいつて、ある部分を曲に合わせてひとりだけで動作する。と、皆がまた曲に合わせて、それをまねるのである。はじめのころは、「何でもすきなもの」と言つても、あるグループのひとりがうさぎになると、どのグループも皆うさぎといったように、他をまねるという傾向がとても強かつた。このようないきなり好きなものといつても、広く考へる余裕もないし、考へが固定してしまつてゐるとも考へられるので、次のように段階をおつてやつてみた。先ず、はじめはこちらから「ぞうになりましよう。」「きしゃになりました。」などと、動作するものを指示する。指示された材料は同じぞうであつても、いくつかのグループには、それぞれの何種類か違つた表現のぞうがでくる。各グループのぞうをわり合つて觀る。このみるといふことも、次の異なつたまね」という曲がある。四才も後半に

ともなつて重要な役割を果たす。指示するものは、動物・花・乗物・玩具などと広範囲にしていく。更に進んで、生活の中から取材したものや、簡単にできるリズムあそび、たとえば砂あそび・たこあげなどが挙げられるし、ただ、リズムだけで身体を動かしてみる抽象的なものだが、動作は簡単ではつきりしているものなどとやっていく。こういう経過を経てから、「何でも好きなもの」と指示すると、思いがけない、活発な機械だの、体操のようなものまでわられて、幼児が喜こんで他人の動作をまねし、そして、それに刺激されてまた、独創性を促すという結果になり、本当によい材料だと痛感した。

次に、リズムあそびから端を発し、自由あそびでぐり返され、期間もかなり長い間四才の後半殆んど全体にわたってあそばれているところあそびがある。今までにはじめての経験であるが、お庭に飼われている小鳥の自由表現からこれを教師のことばによつてつないで小鳥の一日というか小鳥の

生活のようなりズムあそびをやってみた。その後、いつの間にか「小鳥ごっこ」と称して、四、五人のグループから、時には十数人のグループに発展してあそぶようになつたのである。勿論、私も一員として仲間にいれてもらつてあそんだこともある。かけ足で羽ばたいて、一列になつてどんいでたり、池の傍で水を飲んだり、ねたり、遠足にいったり、というように、小鳥になり切つて、広いお庭をあそぶのである。本当に楽しそうに、小鳥になり切つて動作しているので、そこからは、自分から生み出したかわいい独自の自由表現が十分にみられる。

こういう経験をしている幼児を、再び教師の計画で、曲を与えて動作させると、自由表現も活発になり、リズムあそびも表現が豊かになつてくる。

これは、幼児自身の生活にすっかり溶けこんで、幼児自らが発展させてくれたようなものであるが、貴重な体験をしたと思っている。教師だけが、机上の計画を立てて

も幼児が、何を喜こび、何を欲しているか、実際を見つめることができ、本当に大切だと思う。

このようにしてみると、自然、曲に合わせることが、教師も幼児も共に留意する点となつて、指導の目標もその辺におくことができてくる。音楽にのつて楽しく表現するのに、自由表現からはいった結果、既成のものとなつて、皆で動作するものと、簡単なフォーケダンスとを挙げてもよいと思ふ。この場合、四才では特に動作のこまかいや複雑なものは避けなければならぬ。簡単な動作のフォーケダンスを、一曲はゆっくりとひくと、たいへん動きも大きく美しくなり、一曲は速いテンポになると活発に動作するなど、四才の終りの頃は、音楽に合わせて動作することが容易に楽しめるようになつてきた。四才の入園当初のことを思うと、幼児の一年間の発達・成長のめざましさに驚くばかりである。

ここでは音楽リズムの中でも、ふれていなかつてゐる。その中には、きくこと

となどは、うたうことや動きのリズムに自然にあらわれていることである。また、ひくことは、うたうこと、動きのリズムに付隨して指導もしたが、ここでは、四才児では、ごく限られた楽器しか扱わなかつたので特に書き記さないでしまつた。

こうして、ふりかえつてみると、足りなか



四才児の担任として過ごしてきたこの一年間を、一体、どんなつもりで、どんなことをしてきたのだろうかということを、今ここで振り返つてみることにする。更に近く五才児の担任として、一つの指針としても意義があるうと思う。

一応、歌うこと、体を動かしてのリズム、樂器あそび、鑑賞の四つについて考えてみよう。（四才児といつても、大部分が三年保育を経験した幼児三十六名である）

った点なども反省されるが、同じ四才でも

組の編成や、幼児個人個人でも、常に変らないということがないので、一般的な発達や

指導目標を間違いなく捉えた後は、よく幼児の生活にはいつて、幼児を見つめ、そして

よい経験を与えて、生活を豊かにさせるよう心がけるべきだと痛感している。

村井トミ

(一) 歌うこと

歌の場合には特に選曲が大切で、幼児の生活に身近なもの、興味のありそうなもの、リズムの簡単なもの、音域のなるべく狭いもの、歌詞の短いものなどの中より選んだことは三才と同様である。指導

三才の最初から教師の手本というか、教師のする通りにゆうぎをするといふことはしないで、身近な生活の経験などを曲に合わせて自由にたのしくする（表現は幼くとも）というようにしてきたので、四才でもこの点では全く苦労はなかつた。よくこんな質問を受けることがあ

うこと。

(2) 皆と一しょに歌う時は、よく合わせて歌うようにすること。

(3) ひとり、または二、三人で歌う時も恥ずかしがらずにしっかりと歌うこと。

(4) 他の人の歌うのを一生懸命きくこと。

これらの約束の下に教師も子どもと一緒にになって背をのばし、幼児とどちらがまるい口をよく動かして歌えるか競争したり、音楽会ごっこなどを計画して小人数や全員で歌ったり聞いたりの楽しい機会を持つようにした。

(二) 体を動かしてのリズム (1) 自由表現

お腹から真っ直ぐ声が出るように、姿勢を正しくして、口をよく動かして歌

る。自由表現をさせようと思うが子ども

が棒立ちで動かないで困る。どうしたら
よいか?と。これも最初からのふみ出し
によるここと思う。いつも教師から与え
られた通りにするような習慣では急には
ほぐれないのも当然だろうと思われる。

最初からまどまらなくとも、自由表現を
させるようにしむけていれば、後日既成
のゆうぎを与えて、それによって創作意
欲が失われることは決してない。これは
自分の経験からも確かに言えると思う。

四才児としては、自由表現の中にも三才
の時以上に教師の助言や友だちよりのヒ
ントで、表現がより一步豊富になること
と、自由な中にもその曲のリズムによく
合わせて動くという点、また曲に合った
動作がいかに気持ちがいいかということを
ひとりのこらずの子どもに体得させたい
と努力した。

(2) リズムあそび

幼児の興味を一層深くするために、リ
ズムあそびは一番力を入れてしたことだ

った。ここで私の言うリズムあそびは劇

あそびにまで発展するような大きなもの
ではなく、もっと単純なものを意味して
いる。リズムあそびというと何か大げさ

で、子ども会や行事などの折に、教師が汗
をかいて一骨も二骨も折つて練習する。

小道具や準備も大がかりというようなも
のを考えがちではないだろうか。そうで
はなく何時でも何処でもすぐできるよう

なもの、つまり「小さいリズムあそび」
とでも題したいようなものを、しばしば

やりたいと思うのである。だから一つ一
つの自由表現の延長とも言えるし、いく
つかの曲の結びつきとも言えるものであ

る。季節とか環境とか、その折々の材料
を拾つてちょっと計画すれば、幼児を樂
しませんが、これができる。実際に子どもた
ちはこんなことが大好きでリズムの指導

をされているとはつゆ知らず、ごっこ遊
びの続編のような気持でいる。入園当初
気が弱くてリズムに這入らない子どもも
しらずしらずのうちに入っているという

経験もよくあることである。

眼を開けば材料は身近にころがつてい
ると言えよう。五つ六つ具体的の例をあ
げてみることにする。

例一・野原にかわいい花や草がいっぱい

に咲いたり、ゆれたりしている

・蝶や蜂がとんで来て花にとまつた

り、話をしたりする

・お日様がにこにこ輝いている

例二・雨の子になつて降る

・小雨からザーザー大雨になる(強

く、速く)

・また小雨になつてやんてしまふ

(弱く、遅く)

・かたつむりや蛙がよろこんで出て

くる。

・木の葉が気持よきそろに光つてい

る。二、三曲でも変化をつけられ

遲速、速度なども自然に養われる

例三・海の波になる(曲のひき方で大波

でも小波でも自由になる)

・魚が波の間を自由に泳ぐ

(またはボートに乗って行って、海にとびこみ波の間を泳ぐのもよいだろう)

例四・二、三人どんぐりの木になって、

どんぐりの子は木にくついている

・風の子が木のまわりを吹いてゆらす

・どんぐりは落ちてころがる

例五・もみじの木、いちょうの木に、葉になつた子どもがついている

・風が吹く度に散つておどり、曲が静かになつてとまる頃には土の上に落ちてしまう

例六・サンタのおじさんのが袋をかついてやつてくる。袋の口を開ける度にしゃがんでいた子が次々にとび出し、玩具の表現をする

例七・雪の子になつてふる

・子どもが雪投をしたり、雪だるまをつくる

・雪がやんで、お日様が出る

・雪だるまが次第にとけて水になつてしまふ(とけて水になるところなど、実際におもしろい表現をしてくれた)

もっと前後につけたせばもっとおもしろいものになるだろうが、四才という年

令も考え、また気軽にその辺の材料でできるこというところで、この程度がかえつてよいと思う。こんな風に「小さいリズムあそび」をしてあそばせるることは教師自身も実にたのしい。

(3)基礎動作

自由表現、リズムあそびと平行して、歩く、走る、とぶなどの基礎のものも、はつきりと身につけさせたいわけである。

やつてくる。袋の口を開ける度にしゃがんでいた子が次々にとび出しうし、玩具の表現をする

四才でした例を少しあげてみると、歩く、走る、とぶの各々をしつかりとさせる

(4)創作

大体前記の三つを主にし、一曲全体を創作させるようなことは五才の三学期頃の目標でいるので、四才ではごく簡単な踊りの曲を好きなようにさせる程度にした。

前に歩いたり、曲が変わったら、くるりと後を向いて歩いたり、アクセントをつけて歩いたりする

・小円で手をつないで歩いたり、円の中心に集つたり、円の外側を向いて手をつないで前後にふつたりする

・二種類の組合わせを、あてっこいつきるというところで、この程度がかえつてよいと思う。このように扱う(歩くことと走ることなど)

・応用。四つ歩いたら次の四つは兎になつてとぶ。またはそこに自由表現を当てるなど

子どもの発達の状態によつて変化をつけてやると喜んでしてくれる。

楽器の種類としては三才の二学期からハンドカスターをあたえたので、四才では鈴とタンバリンを次第に加えていった。種類はせいぜい三種で、少ないようだが、しっかりと打ったり、よく曲に合わせて合奏したり、交互に打ったり、一しょにならしたり、結構することは多い。種類は少なく、美しく楽しくすることに力を入れた。また、それぞれの楽器を交替して充分に使わせるということも考えに入れなければならない。

よく実習に来た学生さんが、合奏といふと大だいこからトライアングル、シンバル、小だいこまで持ち出してさせようとする。無理もないと思うが、年令を考えなければいけない。たくさんの楽器の交替で、皆満足できず、てんやわんやのさわぎでは何のための器楽指導かわからなくなる。

編曲も簡単なものを美しくした方が気分がいいから、一曲を二つに分奏、または三つに分奏程度にとどめたい。器楽の

合奏の本などをみると、四才では殆んどといってよいくらいむつかしいものが多い。

その組の年令や発達に応じて教師自身が編曲したり、子どもと奏しながら相談してきめていくという方法が適当ではないかと思われる。

また、単に合奏だけでなく、動きのリズムの方にもハンドカスター、鈴、タンバリンを使って興味が一層深くなる。

(四) 鑑賞

友だちの歌をきいたり、ラジオ、テレビの歌や音楽をきいたり、レコードをかけて静かにきいたり、また手足を動かしながらくくという程度のことはした。

たのしい曲・静かな曲・活発な曲・物語など、内容は一応考えたつもりだが、今考えてみると、もっともつと子どもの周囲に音楽を流してやればよかつたと思う。今年はもっと工夫してみようと思う。

子どもに音楽リズムをたのしくさせるには、先ず教師がこれを好きでなければならぬ。「好きこそものの上手なれ」ということわざがあるが、自由でたのしい教師の思いつきも大切だし、数多くの曲を充分に弾きこなせなければならない。その場に応じた適切な曲をすぐに弾いてやらなければならないとしたら、教師自身も自らの勉強に励まなければならない。教師の弾くピアノの音など、耳に入る音をいかに美しく正しいものにすべきか。その方は、レコードやラジオにまかせるとばかりは言つてはいるが、ラジオにまかせるとばかりは言つてはいけない。子どもの遊びをたのしくさせるには、前もつてしらえた、こちらの計画だけの曲では間に合わないからである。

あの子どもたちを見るにつけ、幼稚園の教師は音楽家であり、作曲家であり、そして同時に立派な実際家でなければならぬということをしみじみ痛感する。